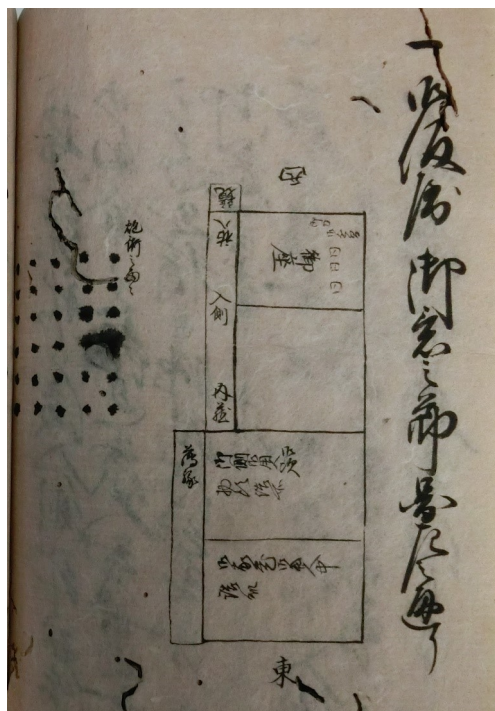
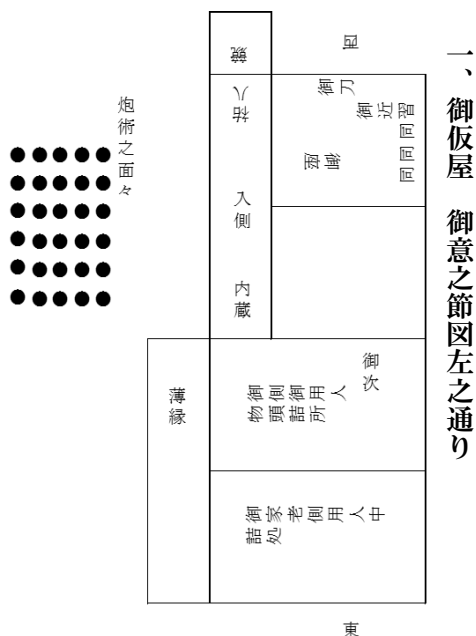




➤ 6

「御居間日記」 文化11年9月25日条（徳山毛利家文庫「御居間日記」457）

きたえる 6

徳山藩主の武芸上覧（2）

《砲術上覧》

剣術と鎗術は館の敷地内で行われていたようですが、ここで取り上げる砲術と馬術・弓術は場所を変えて行われていました。引き続き文化11年（1814）の事例を追いながら、まずは砲術の上覧を見ることにしましょう。

砲術の上覧は、当初の予定日より10日遅れの9月25日に実施されました。場所は遠石浜。行列を組んで出かけることになりますから、前日、お供についての触が出されます。弁当持参の行列です。それもそのはず、「六半時」（午前7時前後）に館を出発、「夜四時」（午後十時頃）に帰館する大掛かりなものでした。

この時の砲術の腕前は大変素晴らしいものだったようで、同行していた当役方からの進言もあって、藩主・毛利広鎮は先例とは異なり、競技者に酒と肴を下賜しています。

上覧の終了に際しては、藩主からの御

意が発せられます。上の写真からは、藩主の御前に競技者が勢揃いして御意を聞いた様子が窺えます（左端の「●」が参加者）。日々砲術の習練を行った藩士の苦労が報われた一時かもしれません。

《馬術・弓術》

馬術上覧は馬場で行われました。文化11年10月5日の場合、「紅葉馬場」で行ったとあります。

まずは「遠的」を2本、師範から順次藩士が実演を披露しました。その終了後、代々弓術をもって藩に仕えている「持弓」の人々がやはり2本ずつ実演しています。

これらが済むと、射術を終えた藩士たちは藩主の御前に勢揃いし、藩主の御意が伝えられました。この時は大変なお褒めの言葉を頂戴したのです。

次に馬術ですが、これは騎乗・疾走して勝敗を競うというものではなかったようです。資料では「乗方」とあって、乗馬の姿勢を



御国廻御行程記
（毛利家文庫30
地誌57(6)）

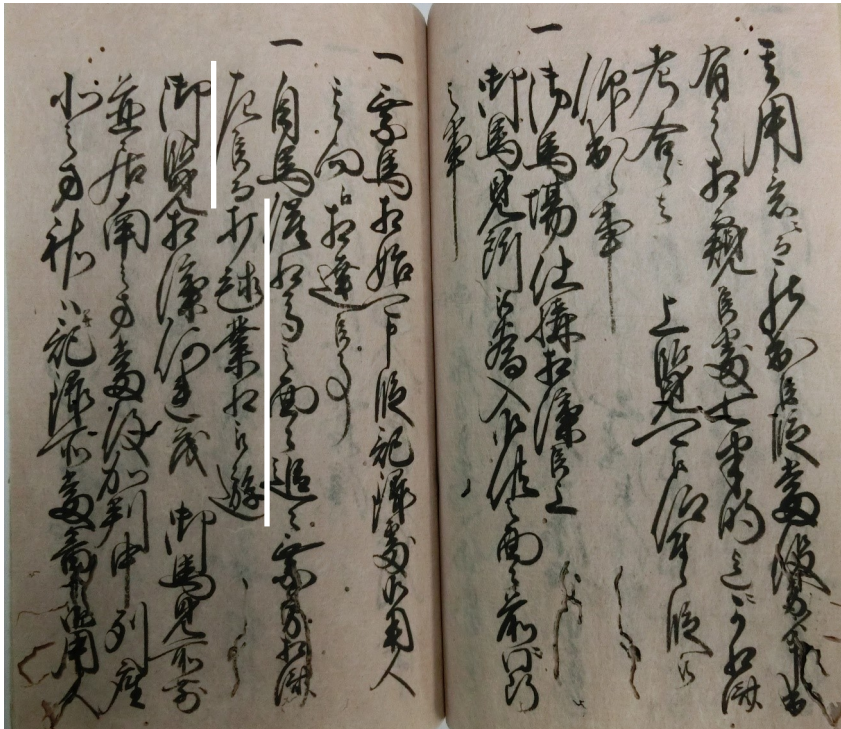
徳山藩自慢の「桜馬場」。
文化11年の上覧は「紅葉馬場」でしたが、年によってはこの「桜馬場」で上覧が行われることもありました。

示すことのように思えます。出場者は自分の馬か、共同で使用する馬（「催馬」とあります。今のシェアカーのようなイメージ？）で出場しています。

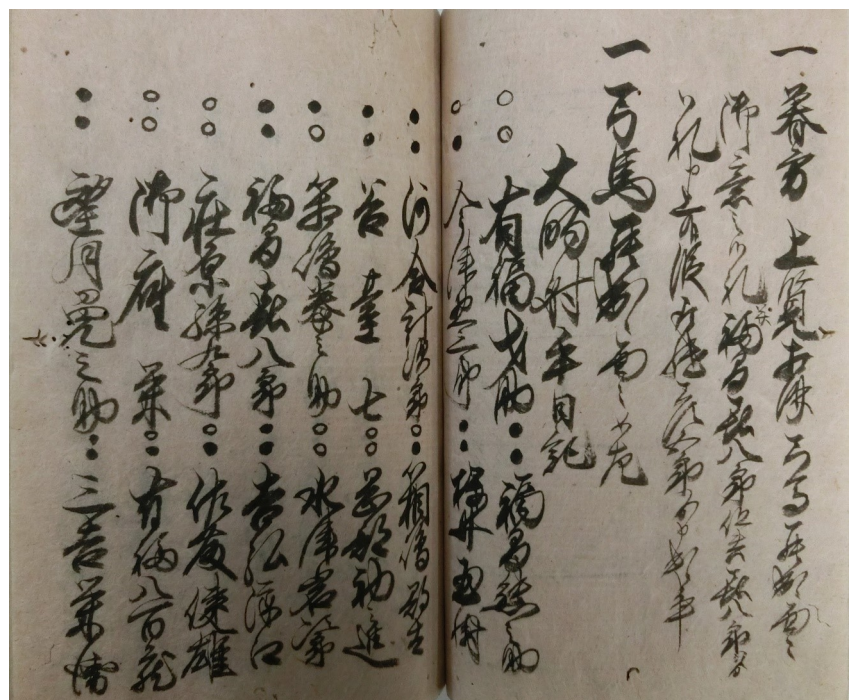
なおこの時は、「打毬」の上覧もあったようです。「打毬」という競技自体は古くからあり、騎乗した人々が二手に分かれ、ステックを用いて毬を相手ゴールに入れるものでした（谷釜尋徳『江戸のスポーツ歴史事典』）。この時の

「打毬」がどのようなものであったかは不詳ですが、これに近いものであったと考えるのが自然かもしれません。

すべての競技が終了すると、藩主の御意が競技者に伝えられます。この時は「何も太義、此上無懈怠出精可仕候（みな大儀であった、これからも怠ることなく励め）」との言葉がありました。



徳山毛利家文庫 御居間日記 457
文化十一年（一八一四）十月五日条より
傍線部 打毬業相被遊 御覧」とあります。馬術上覧と共に実施されたのでした。



徳山毛利家文庫 記録所日記 692

文化十三年（一八一六）九月十四日条より
大的射に参加した藩士の成果。ひとり二回射していますが、右図では○が一五、●が二一との成果です。上覧に参加する以上、腕のたつ藩士が名を連ねたとすれば、●が的中でしょうか…？